

エレミヤ書 23 章 23-29 節

ヘブライ人への手紙第 12 章 1-7、11-14 節

ルカによる福音書第 12 章 49-56 節

昨日は、台風 8 号が関東地方を直撃したようです。コロナ禍に猛暑、そして台風といろいろな脅威が連続しています。大きな被害が出ないことを祈りつつ、主の恵みと守りを信じて歩み続けたいと思います。

本日の旧約日課は、「新共同訳」の小見出しに、「預言者に対する言葉」とある通り、預言者エレミヤが預言者あるいは預言活動という事柄について語っている個所の一部です。預言者は、『聖書』における大切な宗教的役割の一つです。ただし、「よげんしゃ」は漢字で「預言者」とも「予言者」とも表記します。主なる神様から言葉を預かって、現状や過去の出来事について述べるのですが、未来について語る場合もあります。言葉を「預かる（あずかる）」人でもあり、また「予め（あらかじめ）」語る人でもあります。その意味では、「預言」も「予言」も正解ですが、『聖書』では「預言」を用います。

23 章 25 節に「わたしは、わが名によって偽りを預言する預言者たちが、「わたしは夢を見た、夢を見た」と言うのを聞いた。」（エレミヤ 23:25）という表現が出てきます。つまり、偽りを預言する、「偽預言者」も存在したのです。ただし、その預言者が本物であるかどうかを判別するのは困難です。真の預言・預言者か判断する基準はあるにはあるのですが、究極的には判断できるのが主なる神様だけだからです。それ故、自分の意見を主の言葉だと語る偽預言者が横行したのです。また、聞く側も自分の望みや好みの預言を、主なる神様の意思であると耳を傾けてしまうこともありました。なんとなく、現代人とメディアとの関係のようにも思えます。本日の旧約日課は、そのような預言に関する事柄について、ことに語る預言者への警告を語っています。

「いつまで、彼らはこうなのか。偽りを預言し、自分の心が欺くままに預言する預言者たちは、互いに夢を解き明かして、わが民がわたしの名を忘れるように仕向ける。彼らの父祖たちがバアルのゆえにわたしの名を忘れたように。」（エレミヤ 23:26-27）とある通り、預言者エレミヤが批判している預言者たちは、主なる神様の言葉を語りながらも、その意志とは異なる方向へと民を導いていたようです。「エレミヤ書」の時代、北イスラエル王国はすでに滅亡していました。バアル宗教と対決した大預言者エリヤの活躍は、過去の話でした。エレミヤが活動したのは南のユダ王国ですが、現在の偽の預言者たちの行為は、かつての北イスラエルで場ある宗教に関連して起こったことと同じだ、と批判しているのです。

エレミヤの語る言葉は、二千年以上前ですが、情報伝達が高度に発達した今でも、世界で何が起きているのかを正確に判断することは困難です。そもそも、歴史記述という意味では、今、その場に生きている人は、その時の歴史の意味を理

解し、それを記述することはできません。歴史的観点からいえば、エレミヤの時、南ユダ王国にはバビロンの脅威が近づいていました。南ユダ王国の人々は、そのことがよくわからなかった、あるいはわかりたくなかったのかもしれない。それゆえ、主なる神様に選ばれたユダ王国（イスラエル）という観点からどう歩むべきか、それが大切であるとエレミヤは警告しているのです。このような預言者と人々との関係は、現代でも同じです。情報を伝えてくれる様々なメディアは、預言者的でありまた偽預言者的でもあります。それゆえに、自分たちが何を望んでいるのか、望むべきかを見極めることが大切なのです。

現代は、『聖書（旧約）』に存在したような預言者は存在しません（自分はそうだという人を否定するわけではありませんが）。しかし、わたしたちには『聖書（旧約）』の時代以上の多くの主なる神様の「み言葉」があります。それはもちろん『聖書』です。『聖書』は、「預言の言葉」とは異なりますが、「エレミヤ書」23章29節の「このように、わたしの言葉は火に似ていないか。岩を打ち砕く槌のようではないか、と主は言われる」という言葉にある通り、『聖書』が、「慰めや」「知恵」を与える他、現代を理解するための力強い視点を与える存在です。

さて、『聖書（旧約）』の中は、もう一つの宗教的役割に祭司というものがあります。これは、犠牲を献げるなどの神殿祭儀を司る役割です。教会は、ユダヤ教から派生しましたのでこの両方の宗教的機能を引き継いでいます。それでは、イエス様はどうかというと、イエス様も預言者的機能と祭司的機能の両方を持っているともいえますが、福音書の物語を見る限りは、預言者的機能のほうが強いと思います。本日の福音書箇所の子イエス様の言葉は、特に預言者的な機能が強い箇所です。

本日の福音書、そこには「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。その火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか。」（ルカ 12:49）とあります。非常に厳しい言葉です。そして、「あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらすために来たと思うのか。そうではない。言うておくが、むしろ分裂だ。」

（12:51）と続きます。火を投ずる、分裂をもたらす、これらの言葉は、イエス様の平和、和解などのイメージとは異なります。平行箇所であるマタイ福音書では、「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ」（マタイ 10:34）とあります。本日のルカの箇所も、基本的はこの並行箇所の子イエス様と同じことを語っていると思います。つまり偽りの平和を壊すということです。しかし、ルカ福音書のほうは、この衝撃的な言葉の間に、「しかし、わたしには受けねばならない洗礼がある。それが終わるまで、わたしはどんなに苦しむことだろう。」（12:50）という部分があり、その火の投入に至るまでに、「洗礼」があることを述べます。そして、その洗礼まで、イエス様の苦しみがあることを述べています。

「受けなければならない洗礼」ですが、この部分の「洗礼」は、イエス様が洗礼者ヨハネから受けられた洗礼のことではありません。十字架の死を「洗礼」に譬えています。あるいは、この世界の終わり、終末時の救いの完成のことを意味

しているともいえるでしょう。そして、それを受けるまで、「どんなに苦しむこと」の「苦しむ」ですが、これは、他の部分の苦しみとは異なる言葉です。「ともに持つ」「いっしょに持つ」という意味で、「持つ」という言葉が基本にあります。それが受動態になり、「持たされる、周りを囲む」、そのような意味で苦しみなのです。「苦しむ」としか表現できないのですが、差し迫る苦しみというよりも、のしかかってくる苦しみという感じでしょうか。

イエス様は、火を投じると、厳しいことを命じていますが、「それが終わるまで、わたしはどんなに苦しむことだろう」とご自身の十字架の苦しみはもちろんのこと、世界の終わりがくるまで、苦しみ続けなければならないことを語っています。この点は、偽りの平和ではなく、真の平和を求めること、十字架を担うことと結び付けてキリスト者に語り掛けるマタイ福音書とは視点が異なります。ルカ福音書の描くイエス様は、「偽りの平和」の中で、イエス様自身が苦しんでくださることを示しているのです。

「偽りの平和」とは何か。ここでは「エレミヤ書」とは異なり、また身近に感じられる表現で描かれています。父と子（息子）、母と娘、しゅとめと嫁、具体的に分裂と対立する存在をイエス様は例にあげています。これらの人々が仲良く暮らしていることは、良いことです。しかし、もしそこに誰かが一方的に我慢し苦しんでいる状況であれば、イエス様はそれを壊すと語っているのです。家族関係が社会の根底である。それは、今も昔も変わりません（まず家庭という概念そのものを破壊することが世界を変えるために重要だというイデオロギーもありますが、イエス様のはそれとは異なります）。家族と言う人間関係が他の家族と結びついて地域・社会を形成し、人間の世界全体を構築しています。だからこそ、そこにもし偽りの平和があるならば壊すとイエス様は語っているのです。しかし、その時に起こる、痛みや苦しみ、それらは、単に人々に強いるのではなく、イエス様自身が苦しみとして受けてくださるのです。このイエス様の言葉は、優しく愛に満ちたイメージとはかけ離れているかもしれません。しかし、十字架に向かいながら、様々な人と苦しみを共にされるイエス様だからこそ、語れた言葉であると思います。

本日の使徒書は、ヘブル書の続きです。そこには「こういうわけで、わたしたちもまた、このようにおびただしい証人の群れに囲まれている以上、すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか、信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。このイエスは、御自身の前にある喜びを捨て、恥をもいとわないうで十字架の死を耐え忍び、神の玉座の右にお座りになったのです」（12:1～2）とあります。イエス様が信仰の創始者であり完成者であるから、そのイエス様をみつめながら、今まで存在した周りにおける信頼できるものを信頼し、しかし周りにおける捨てるべきものを捨て、走りぬくことを求めています。

本日の聖書日課のすべてから、「み言葉」である『聖書』がわたしたちに示している事柄は、ただ頑張ることを求めているのではなく、ただ平和を言葉にする

ことを求めているのでもなく、火をもたらすことによる分裂からくる平和を求めるように、真の平和を見極め、求めなさいということです。イエス様の十字架の死と復活が、真の平和の根拠であり、またその先取りであるからです。

今、様々なメディアで、いろいろな事柄が重なって宗教が話題になっています。また、宗教と政治とのかかわりも問題になっています。ここでは深く立ち入ることはしませんが、宗教には色々な機能があることを再確認することは大切です。宗教の機能、それには大きく分けて、その場にある秩序を維持する機能と破壊する機能の両方があります。これは矛盾です。しかし、宗教はこの矛盾した両方の機能を持っているのです。先に見たエレミヤのように『聖書（旧約）』に描かれている預言活動が典型的にそのことを示しています。預言の言葉は、現状が主なる神様の意思の通りでなければ、それを破壊しようと機能します。しかし、現状が主なる神様の意思の通りであれば、それを維持しようと機能するのです。先に見た、真の預言者と偽の預言者との関係もそのことに関わります。人間の側で現状は良いと思っても、それが主なる神様の意思に添わなければ、預言者はその現状の破壊を語るからです。そして、偽預言者は、現状維持を訴えるのです。

本日のイエス様の言葉には、根本的に大切なことを求めるがゆえに、破壊的な内容を持っています。偽りの平和を破壊することです。今日の物語のイエス様は、そのような視点で社会を見ることを、世界を見ることをわたしたちにもとめています。「平和」について教会が求めるべき事柄は、主なる神様の「真の平和」にほかなりません。ただし、「真の平和」を求めるがゆえに、実際に戦争を起こしてしまったり、あるいは戦争が起きるような状況を作り上げてしまったりは、イエス様の意図とは異なると思います。それは、言葉では平和を語りますが、あるいは平和運動のように見えますが、実際には武力を通してでも、自国の利益や領土を広げたいと思う人々の見方をするようになるからです。

その意味では、教会がすべきことは、政治的主張ではありません。主なる神様が求める真の平和がどれほど素晴らしいかを、教会で実現し、示し続けること、そのようにして平和を語り続けることです。言い換えれば教会がその平和のモデルを新しいイスラエルとして実現することです。しかし、教会は、二千年の歴史がありますが、まだそのことを具体化できていません。積極的な政治的発言もよいのですが、それを語る教会の中に平和がなければ、主なる神様の意思にそった働きではないのです。

本日は、8月14日、私たちにとっては一年で特別な日の一日前であり、平和のために祈る時です。「偽善者よ、このように空や地の模様を見分けることは知っているのに、どうして今の時を見分けることを知らないのか。」(ルカ 12:56) 今何が本当の平和であるか見極めることは、なかなか難しいと思います。またそれを実現することはさらに難しいと思います。しかし、どのような思想やイデオロギーであっても、それらを持つ一部の人間が喜ぶ平和は、本当の平和ではないとイエス様は語っています。これからも主なる神様に喜ばれる平和を目指して、歩み続けたいと思います。その平和を示す教会でありたいと思います。